

令和 8 (2026) 年度 病害虫発生予報 第 5 号

令和 8 (2026) 年 8 月 24 日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

予想期間：8 月下旬～9 月下旬 予報の根拠で、(+) は増加要因、(-) は減少要因を表す。

1 水稻 斑点米カメムシ類（クモヘリカメムシ、イネカメムシ、ホソハリカメムシ、ミナミアオカメムシ、アカスジカスミカメ、イネホソミドリカスミカメ）

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠
 - ・ 7 月下旬の水田すくい取り調査での発生量は平年並（±）
 - ・ 向こう 1 か月の気温は高く（+）、降水量はほぼ平年並（±）の見込み
- (3) 対策
 - ・ 出穂期の薬剤防除後も発生が多い場合は、7～10 日間隔で 1～2 回の追加防除を行う。
 - ・ 周辺より出穂が早い、または遅い品種・作型では、被害が集中しやすいため防除を徹底する。
 - ・ 斑点米カメムシ類の誘引源となる水田内のイネ科雑草、ホタルイ等を防除する。
 - ・ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
 - ・ 収穫後は速やかに秋耕を行う。
- (4) 備考
 - ・ [病害虫発生予察注意報第 3 号](#)、[植物防疫ニュース No. 4](#)、[イネカメムシの薬剤感受性検定結果](#)、[病害虫防除のポイント No. 16](#)、[No. 23](#) を当センターホームページ（HP）に掲載中

2 大豆 吸実性カメムシ類（ホソヘリカメムシ、イチモンジカメムシ、アオクサカメムシ、クサギカメムシ等）

- (1) 発生予想 発生量：平年並
- (2) 根拠
 - ・ 現在の発生量はやや少ない（-）
 - ・ 向こう 1 か月の気温は高く（+）、降水量はほぼ平年並（±）の見込み
- (3) 対策
 - ・ 莢伸長期（開花 15 日後）から子実肥大後期頃（開花 50 日後）まで、発生状況に応じて 10～14 日間隔で散布する。

3 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠
 - ・ 現在の発生量はやや多い（+）
 - ・ 向こう 1 か月の気温は高い（-）、降水量はほぼ平年並（±）の見込み
- (3) 対策
 - ・ 本ばへの持ち込みを防ぐため、育苗期の防除を徹底する。
 - ・ 予防を主体に、葉裏にもよくかかるように RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- (4) 備考
 - ・ [令和 8 \(2026\) 年度植物防疫ニュース No. 7](#) を当センターHP に掲載中

4 いちご 炭疽病

- (1) 発生予想 発生量：平年並
- (2) 根拠
 - ・現在の発生量はやや少ない（－）
 - ・向こう1か月の気温は高い（＋）、降水量はほぼ平年並（±）の見込み
- (3) 対策
 - ・本ぼへの持ち込みを防ぐため、育苗期の防除を徹底する。
 - ・予防を主体に、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
 - ・胞子の飛散を防ぐため、点滴チューブの使用等、水のはね返りのない方法でかん水する。
 - ・発病株や周辺株は早急に抜き取ってほ場外へ持ち出し、嫌氣的発酵処理（罹病残さを肥料袋等に詰め、空気を排出して口を閉じ、日当たりの良い野外に放置する）後に処分する。
- (4) 備考
 - ・[令和8（2026）年度植物防疫ニュース No. 7](#)、[イチゴ炭疽病菌の薬剤感受性検定結果](#)、[病害虫防除対策のポイント No. 21](#)を当センターHPに掲載中

5 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠
 - ・現在の発生量は平年並（±）
 - ・向こう1か月の気温は高い見込み（＋）
- (3) 対策
 - ・育苗期後半～定植当日にモベントフロアブル(I:23)をかん注する。
なお、天敵を導入するほ場では、天敵への影響日数（45日）に注意して使用する。
 - ・本ぼへの持ち込みを防ぐため、育苗期の防除を徹底する。
 - ・定植苗の高濃度炭酸ガス処理を適切に行う。
 - ・ハダニ類は葉裏に寄生するため、薬剤散布時は薬剤が葉裏に付着するように散布する。
なお、化学農薬に対する感受性低下が起こりやすいため、必ずRACコードの異なる薬剤をローテーション散布するとともに、抵抗性の発達しにくい気門封鎖剤を活用する。
- (4) 備考
 - ・[令和8（2026）年度植物防疫ニュース No. 7](#)、[ナミハダニ\(いちご\)の薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中

6 トマト コナジラミ類（黄化葉巻病（TYLCV）、黄化病（ToCV））

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠
 - ・現在のコナジラミ類の発生量はやや多い（＋）
 - ・向こう1か月の気温は高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）の見込み
- (3) 対策
 - ・育苗期後半～定植当日にベリマーク SC(I:28)をかん注する。
 - ・ウイルスを媒介するコナジラミ類の侵入を防ぐため、ハウスの開口部（出入り口、側窓、天窓）に0.4mm目合以下の防虫ネットを展張し、特に出入り口は二重にする。
 - ・黄色粘着板の設置により、コナジラミ類の早期発見に努める。
 - ・発生が見られた場合には、アニキ乳剤(I:6)等を散布する。
 - ・黄化葉巻病の耐病性品種であっても、感受性品種と同様に、コナジラミ類を適切に防除する。
 - ・ウイルス病の発病株は見つけ次第抜き取り、土中に埋設するか、ポリ袋などで密封し枯死させてから処分する。
 - ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- (4) 備考
 - ・[病害虫防除対策のポイントNo.22](#)、[タバココナジラミ類薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中

7 ねぎ シロイチモジヨトウ

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠
 - ・フェロモントラップへの成虫誘殺数はやや多い（＋）
 - ・現在の発生量は少ない（－）
 - ・向こう 1 か月の気温は高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）の見込み
- (3) 対策
 - ・ほ場周辺の雑草は増殖源となるため、除草を徹底する。
 - ・ほ場をこまめに観察し、本種による被害葉（葉が白く透けて垂れ下がる）を探すなど早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに摘み取り処分する。
 - ・幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるため、葉に食入する前の若齢のうちに薬剤防除を行う。
 - ・薬剤の葉への付着と浸透性を高めるため、機能性展着剤を活用する。薬害の発生を避けるため、使用方法をよく確認して適切に使用する。
 - ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- (4) 備考
 - ・[令和 8（2026）年度植物防疫ニュース No. 5](#)を当センターHP に掲載中

8 だいず・野菜類・花き類 ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想 発生量：平年並
- (2) 根拠
 - ・フェロモントラップへの誘殺数はやや少ない（－）
 - ・現在のだいずでの発生量はやや少ない（－）
 - ・向こう 1 か月の気温は高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）の見込み
- (3) 対策
 - ・ほ場周辺の雑草は増殖源となるため、除草を徹底する。
 - ・施設栽培では、開口部に 4 mm 目合以下の防虫ネットを展張し、侵入を防止する。
 - ・葉裏をよく観察し、早期発見に努める。
 - ・卵塊や分散前の幼虫は、寄生葉ごと摘み取り、発生源とならないように適切に処分する。
 - ・幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるため、発生初期の若齢幼虫のうちに薬剤防除を行う。
 - ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。

9 だいず・野菜類・花き類 オオタバコガ

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠
 - ・フェロモントラップへの誘殺数は平年並（±）
 - ・向こう 1 か月の気温は高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）の見込み
- (3) 対策
 - ・ほ場周辺の雑草は増殖源となるため、除草を徹底する。
 - ・施設栽培では、開口部に 4 mm 目合以下の防虫ネットを展張し、侵入を防止する。
 - ・新しい食害痕や虫ふんを目印に早期発見に努め、発見したら速やかに防除する。
 - ・薬剤の浸透性を高める展着剤の利用が有効である。
 - ・摘除した果実や脇芽等の残さは発生源となることがあるため、ほ場外へ持ち出して土中に埋設する等、適切に処分する。
 - ・発生ほ場では、土中に残る蛹を殺すため、栽培終了後、速やかに十分耕耘する。

10 なし ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠
 - ・現在の発生量が多い（＋）
 - ・向こう1か月の気温は高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）の見込み
- (3) 対策
 - ・ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
 - ・化学農薬に対する感受性低下が起こりやすいため、必ず RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布するとともに、抵抗性の発達しにくい気門封鎖剤を活用する。
 - ・天敵製剤の活用や土着天敵の保護利用に取り組む園地では、天敵に影響のある薬剤の使用をできるだけ控える。
 - ・品種によって収穫時期が異なるため、農薬の使用時期（収穫前日数）に十分注意する。
- (4) 備考
 - ・果樹カメムシ類の防除で用いる合成ピレスロイド剤や有機リン剤がハダニ類の天敵類に影響を及ぼし、ハダニ類が増加する場合があるため、定期的に発生状況を確認する。
 - ・[ナミハダニ\(園芸作物\)の薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中

11 果樹類 果樹カメムシ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠
 - ・フェロモントラップへの誘殺数はやや多い（＋）
 - ・向こう1か月の気温は高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）の見込み
- (3) 対策
 - ・4mm 目合以下の多目的防災網で園全体を被覆し、被害を防止する。多目的防災網に破れや隙間がある場合には補修して侵入を予防する。
 - ・山林に近い園地や過去に被害の大きかった園地では、飛来状況を特によく観察し、発生を確認した場合は速やかに捕殺するとともに、薬剤散布を行う。
- (4) 備考
 - ・気温及び湿度の高い日は夜間の飛来量が多い傾向があるので注意する。
 - ・[チャバネアオカメムシの薬剤感受性検定結果](#)、[フェロモントラップ調査結果](#)を当センターHPに掲載中

12 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現況	発生予想	作物名	病害虫名	現況	発生予想
水稻	いもち病	少	少	ねぎ	アザミウマ類	やや多	多
	紋枯病	平年並	平年並	なし	ナミハダニ	平年並	やや多
	縞葉枯病	平年並	平年並	りんご	褐斑病	多	多
だいず	べと病	やや少	平年並		斑点落葉病	やや多	多
なす	アブラムシ類	やや少	やや少	きく	ハダニ類	平年並	やや多
	ハダニ類	平年並	やや多				

○ 今後の病害虫対策

(1) 定植前・定植時の防除の徹底

- ・いちご、トマト、きゅうり等の施設栽培では、定植前～定植後にかけて、施設内に病害虫を「入れない・持ち込まない」対策を徹底しましょう。
- ・定植時の苗に対する薬剤処理（粒剤・灌注剤等）によって、施設への害虫の持ち込みを防止しましょう。
- ・施設開口部への防虫ネットの展張によって、コナジラミ類やアザミウマ類等の微小害虫、ハスモンヨトウやオオタバコガ等のチョウ目害虫の侵入を防止しましょう。
- ・イチゴ炭疽病やイチゴ萎黄病、トマト黄化葉巻病（タバココナジラミ媒介）、キュウリ黄化えそ病（ミナミキイロアザミウマ媒介）等の施設内での発生・まん延を防止するため、定植時に感染が疑われる苗は適切に処分し、健全苗の定植に努めましょう。

○ 農薬の安全使用等

(1) 薬剤抵抗性発達の抑制

- ・薬剤で防除する際には、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。

(2) 有用生物への影響に留意

- ・花粉媒介昆虫（ミツバチ、マルハナバチ）や天敵に対する影響日数に注意して薬剤を選択しましょう。

(3) 農薬適正使用の徹底

- ・農薬は適正に保管・管理しましょう。
- ・農薬を使用する際は、容器のラベルに記載された内容を遵守し、農薬による事故等の発生を防ぎましょう。
- ・薬剤散布の後には必ず作業内容を記録し、防除履歴を作成しましょう。
- ・農薬の総使用回数は有効成分ごとに定められています。ラベルを十分確認し、有効成分ごとの総使用回数を超えないよう適正に使用しましょう。

○ 1か月気象予報（予報期間：8月22日～9月21日 8月20日 気象庁 発表）

- ・暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高く、期間の前半はかなり高くなる見込みです。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）

項 目	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気 温	1 0	1 0	8 0
降 水 量	4 0	3 0	3 0
日照時間	3 0	3 0	4 0

○ お問い合わせ等

- ・詳細は農業総合研究センター環境技術指導部防除課（TEL 028-665-1244）までお問合せください。
- ・病害虫情報発表のお知らせは、[X「栃木県農政部\(@tochigi_nousei\)」](https://twitter.com/tochigi_nousei)、[農業総合研究センターHP \(https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html\)](https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html)でも御確認いただけます。
- ・[カメムシ防除作戦 HP \(https://www.pref.tochigi.lg.jp/g05/kamemushi.html\)](https://www.pref.tochigi.lg.jp/g05/kamemushi.html)も御確認ください。



X「栃木県農政部」



農業総合研究 HP



カメムシ防除作戦 HP